

# 井上円了の沖縄巡講

巡講の内容と筆禍事件

佐藤厚

*saton atsushi*

## 1. 問題の所在

井上円了（以下円了と略称する）の教育活動は大きく二つに分けられる。一つは1887（明治20）年の哲学館の開設に始まる学校教育、もう一つは1904（明治37）年の修身教会の設立に始まる社会教育である。この中、修身教会は日本人の道德の向上のために、当時の国民道德の基本であった「教育勅語」を、学校だけでなく社会人に対しても教育するための組織である。円了は、西洋の日曜学校をモデルとして、全国の寺院、教会がこの役割を行うことを構想していた。そして、その設立を訴えるために1906（明治39）年から全国を巡回して講演を行った。講演に際しては有料で揮毫を行い、それを修身教会の中心ともいえる哲学堂の建設費用に充てることも行った。この全国巡講の全体像については三浦節夫<sup>(1)</sup>による整理があり、また修身教会活動については朝倉輝一<sup>(2)</sup>の論考がある。

筆者は近年、巡講の具体的な内容、例えば巡講の講演内容やそれに対する人々の反応などを調査している。これにより円了の修身教会設立運動の意味が具体的に理解できるようになると考える。筆者はその一環として、2014（平成26）年には、当時日本の植民地であった朝鮮を巡講した朝鮮巡講に関する資料を、当時の新聞、雑誌の記事から収集し整理した<sup>(3)</sup>。今回はこれに続き1907（明治40）年2月に行われた沖縄巡講を

とりあげる。

筆者が今回、沖縄巡講をとりあげた理由は二つある。第一には、資料の発見である。これまで沖縄巡講の資料は円了自身が著わした『南船北馬集』第1編所収の「沖縄県紀行」しかなかったが、筆者は近年復刻された沖縄教育会の機関紙『沖縄教育』（不二出版、2009年より）に円了の講演内容などの記録があることを発見した。さらに新聞『琉球新報』にも関連する記事があった。これらにより巡講の内容を知る情報が増えたことが一つの理由である。第二には、副題に記した「筆禍事件」である。円了は講演後、「沖縄紀行」と題した報告をまとめ、その中で沖縄人は忠君愛国の精神に欠ける等のことを述べた。これに対して沖縄の新聞社が怒り、円了を激しく批判する記事を載せたのである。この背後には、沖縄の日本への同化という問題が関わっている。さらにそれは、近代日本における国民道徳論がはらむ問題につながると考えられる。よってこれは近代日本史における円了の位置づけ、影響を考える上で重要な材料を提供すると考えられる。

今回、論文を著わすに際し、筆者自身も沖縄を直接見聞するの必要を感じ、今年度（2015年）の9月、井上円了研究センターの支援を得て沖縄に行き、円了の巡講地（那覇、名護、糸満）を訪れた。論文の中ではその時の情報も反映させている。

## 2. 修身教会設立活動－沖縄巡講までの流れ

ここでは時系列で、沖縄巡講までの修身教会設立活動を整理することにより沖縄巡講の位置づけを確認する。巻末に＜資料1＞として年表を作成したので参照していただきたい。

1902（明治35）年、円了44歳。この年の6月、円了は『宗教改革案』を刊行する。この中に修身教会の萌芽が見える。すなわち宗教改良の方法五条の中に「各宗寺院各教会は毎週一回、必ず教会を開きて教導の実

を挙げること」(4)を挙げている。そして11月から第2回世界旅行に出発して、西洋の社会教育を具体的に観察してくる。しかし、旅行に出て1か月後の12月に哲学館事件が発生する。

1903(明治36)年、円了45歳。円了は7月に世界旅行から帰国した。円了は欧米での社会教育、とくに教会が行う日曜学校が社会教育としての機能を行っていることを直接目にしてきた。そして9月に『修身教会設立旨趣』を刊行した。翌月にはこれを内務大臣、文部大臣に送付する。さらに各府県知事にも送付した。

1904(明治37)年、円了46歳。1月には、全国の各府県町村長・小学校長に『修身教会設立旨趣』を送付した。その1か月後、『修身教会雑誌』の刊行を開始する。同じ月、日露戦争が勃発し、日本は戦時体制に入る。4月には修身教会の本拠地ともいえる哲学堂が落成した。1905(明治38)年、円了47歳。9月に日露戦争は終結する。同年、円了は哲学館事件の処理をめぐる問題から体調を崩し、学校経営から引退することを決意する。

1906(明治39)年、円了48歳。1月、円了は哲学館大学学長、京北中学校長を辞任する。そして、4月から奈良、京都、大阪を巡講する。この時の巡講から『南船北馬集』への記録が始まる。そして6月には足尾・長岡、7月には香川、8月から10月まで長崎を巡講する。さらに大陸に渡り、11月下旬まで朝鮮、満州を巡講する。帰国した円了は12月に、退任の辞を付した『修身教会要旨』(内容は『修身教会旨趣』と同じもの)を刊行するとともに、雑誌『修身教会雑誌』を36号で終える。

1907(明治40)年、円了49歳。1月に装いも新たに『修身』の刊行を開始する。巻号数は4巻1号から開始するので『修身教会雑誌』の後継である。そして2月の2日から15日まで沖縄巡講を行うのである。

以上が沖縄巡講までの円了の活動を整理したものである。これを見ると、沖縄巡講の位置は、修身教会設立のための巡講の2年目に行われた

ものであり、修身教会運動の流れにあることがわかる。ただ、同時に沖縄巡講が一つの区切りにもなっている。その根拠は、一つには、『修身教会雑誌』を『修身』に改題していること。もう一つは12月に再度『修身教会要旨』を刊行していることである。具体的なことについては改題した『修身』誌を調査する必要があるが、これは現在、閲覧が容易ではないため今後の課題とする。

### 3. 巡講の内容

#### 3-1 資料

前述したように、円了の沖縄巡講の資料は、従来は『南船北馬集』第1編「沖縄県紀行」しかなかったが、近年、沖縄教育会の機関紙『沖縄教育』が復刊され、そこに次の記事があることが判明した。

題 目	号	発行年月日
a「井上文学博士の来県」	12	1907年2月15日
b「評議会」	同上	同上
c「臨時総会並講話会」	同上	同上
d「精神修養法：井上博士の演説」	13	同年3月15日
e「心理的妖怪：井上博士の演説」	同上	同上
f 仲本政世「文学博士井上円了氏の来県中の所感」	同上	同上
g「井上（円了）文学博士の報告」	18	同年8月15日
h「井上博士沖縄紀行」	19	同年9月15日

aは円了の来県に関する報告である。bは沖縄県教育会の評議会の協議事項を記したもので、その中に円了関係の記述がある。cは2月3日に開催された教育会の臨時総会と円了の講話に関する記録である。dとeは円了の講演内容を筆記したものである。fは沖縄県の県属であり円了の巡講中に円了の支援を行った仲本政世が、円了が行った全講演の要

旨を整理したものである。g は円了が巡講終了 2 か月後の 4 月に、沖縄巡講の報告を文部大臣牧野伸顕に対して提出したものである。h は『南船北馬集』第一編「沖縄県紀行」の内容と同じものである。これは本来、円了が修身教会の雑誌『修身』に掲載したものを転載したものである。また沖縄の新聞『琉球新報』にも円了の沖縄巡講に関する記事がある。

これらはいずれも貴重であり翻刻と整理を行う必要があるが、今回は紙幅の関係で必要な部分だけに言及し、翻刻は別稿で行う予定である。

### 3-2 内容

ここでは円了の巡講の概要を、『南船北馬集』第 1 編「沖縄県紀行」を基礎とし、それに前述した『沖縄教育』関連記事や新聞、および筆者の見聞を合わせて述べる。

円了の「沖縄県紀行」によれば、沖縄巡講の記述は 1 月 27 日から始まる。しかし、沖縄県側では当然であるが、それ以前から円了来訪に対する準備が始まっていた。『沖縄教育』12 号「評議会」によれば、1 月 10 日に沖縄教育会の評議会が開催され、その中で円了の来県に際して、教育会で講話を請い、謝礼を支払うことが記されている。

そもそも円了の巡講はどのようにして行われたのであろうか。本論文の 3-4 で見るが、円了は沖縄巡講にあたり、あらかじめ文部大臣から「御書添」を得ていた。おそらく、これと同時に文部大臣から、巡講先の自治体や教育関係機関に通達のようなものが出ていたのではないか。だからこそ円了が沖縄に到着すると、県知事以下、現地の有力な人士たちが円了を出迎えたのだと思われる。

では実際に巡講の経緯を見ていく。巻末に略地図を作製したので参考にさせていただきたい。円了は 1907（明治 40）年 1 月 27 日に東京を出発し、28 日に大阪港にて平壤丸に乗り換え、神戸を経て 30 日に鹿児島に寄港した。31 日に鹿児島を発して沖縄に向かう。

2月1日（金）大島（奄美大島）に寄港。名瀬湾に5時間停泊した後、出港する。いよいよ沖縄巡講の始まりである。（巻末〈地図1〉参照）

2月2日（土）、午前10時、円了を乗せた船が那覇港に入港した。県属の仲本政世が船中に迎えに行き、上陸する。港には県知事の奈良原繁を始めとして数十名が出迎えに来ていた。「沖縄県紀行」にある名前を列挙すると、奈良原知事、事務官日比重明、岸本賀昌、和田勇、尚公爵家扶持花朝章、師範学校長西村光弥、中学校長大久保周八、文学士伊波普猷、県属山口源七、真教寺住職田原法水、同副住職田原法馨、哲学館出身者の阿波根朝祥、同岩原祖順などである。この中、哲学館出身の阿波根朝祥と岩原祖順は、『東洋大学卒業生名簿』を見ると、岩原祖順は1903（明治36）年7月に哲学部卒業とあるが、阿波根朝祥の名前はない。阿波根の名前は1918（大正7）年の『東洋大学一覧』の「出身者一覧」には名前があることから⑤、在学はしていたものの卒業はしなかったものと考えられる。

午前中、円了は阿波根、岩原の案内で、那覇の内外8か所を巡覧する。（巻末〈地図2〉参照）それは知事官舎、南陽館、孔子聖廟、泡盛製造場、阿旦葉製造場、崇元寺、波上官幣小社、奥山公園である。この中、円了は波上神社の眺望が最もよかったとして漢詩を詠んでいる。

2月3日（日）晴。午後、沖縄県教育会の依頼で那覇区内の松山小学校で講演を行った。2日付の『琉球新報』には、沖縄県教育会の名前で次の広告が出された。「本月三日午後二時ヨリ松山尋常小学校ニ於テ文学博士井上円了氏ノ講話（精神修養法、心理的妖怪）有之候条、何人ニ拘ラズ傍聴差支無之候也」。

松山小学校は1902（明治35）年に松山尋常小学校として設立された学校で、1941（昭和16）年に松山国民学校と改称された後、1944（昭和19）年10月10日の空襲で焼失し、現在は松山公園の中に石碑だけが残っている。演題は「精神修養法」と「心理的妖怪」である。「精神修養法」は、

その冒頭で「精神修養法は修身教会設立の趣旨と相全じ、されば修身教会設立の趣意を述べんか」として、その理由を四点にわたり説いている。「心理的妖怪」は円了の妖怪学に基づくもので、通常、我々が妖怪と考えるものは実際に存在するものではなく、人間の心理現象に過ぎないということを、例を挙げながら説いている。『沖縄教育』12号「臨時総会並講話会」によれば「聴衆無慮八百余、立錫の余地な」しであったという。

この会には県知事の奈良原繁(1834-1918)も参加していた。円了と奈良原とは初対面ではなく、円了が欧州を旅行した時、ロンドンとローマで会っていた(6)。これは円了の第一回目の世界旅行(明治21年から22年)のことと思われる。よって円了と奈良原は約20年ぶりの再会であった。円了は奈良原に長寿を寿ぐ漢詩を奉呈している。

2月4日(月)雨。愛国婦人会と医学会有志の依頼に応じて講演を行った。会場は真教寺である。真教寺は真宗大谷派の寺院であり、現在も存在している(7)。沖縄の仏教は、明治以前は臨済宗と真言宗が主流であったが、明治になり田原法水(1843-1927)が単身、沖縄に渡り真教寺を建立して真宗の教えを開いた。円了は田原法水について、中国の開教における小栗栖香頂、朝鮮の開教における奥村円心と並ぶ「海外布教の三傑」と称賛している。円了は田原法水に漢詩を奉呈している。

このときの演題は、愛国婦人会主催が「迷信と宗教との関係」、医学会有志主催が「心意療法」である。「迷信と宗教との関係」の内容は、インド、中国、朝鮮での迷信の例を挙げ、東洋に迷信が多いのは家庭が原因であること、また婦人に迷信が多いのは意志が弱く、かつ物に感じやすいためであるという。さらに迷信を除くには心を強くする必要があり、そのためには宗教が必要であると述べる。最後に智情意は教育で発達させることが可能であるが、安心立命は宗教が必要であることを述べる。

「心意療法」の内容は、『病堂策』という書物に示される病の分類を述べ、中でも心の病を治療する六つの方法を述べた後、身病は医術によっ

て治療し、心病は心意作用にて治すべきであること。催眠術で病気を治した例が少なくないことを説いている。

2月5日（火）晴。円了は首里に行く。（巻末〈地図3〉参照）午後、師範学校で講演を行った。師範学校は1886（明治19）年に「沖縄県尋常師範学校」という名称で開校し、1898（明治31）年に「沖縄県師範学校」と改称。1904（明治37）年には校舎が全焼して首里城内の仮校舎に移転した。円了が訪れたのはこの時である。ちなみに円了の講演の5か月後の1907（明治40）年7月に校舎は再建された。後、女子部を合併するが、師範学校の男子部は首里城を望む龍潭池畔に所在した。筆者は師範学校の跡地で、当時の門柱と師範学校を記念する碑（龍潭同窓会建立）を見た。

さて、この時の聴衆は同校生徒および高等女学校の生徒であった。演題は「教育と宗教との関係」、「靈魂不滅談」である。「教育と宗教との関係」の内容は、教育を、学校教育、家庭教育、社会教育、自然教育、美術教育の五つに分け、この中、自然教育と美術教育とについて説明した後、宗教を世間道と出世間道とに分け、前者が道德、後者が安心立命であると述べる。そして道德だけで宗教がなければ土台が堅固でない建物と同じであると述べる。「靈魂不滅談」の内容は、人類の祖先は猿、その祖先は生物である。さらにその祖先は地球の一分子である。よって我々はこの地球の一分子である。よって一人が死んでも全体は死なない。これが全体の靈魂が不滅なる理由である。しかし死んだ一人の靈魂がどうなるかは問題であると述べる。

円了はこの時、初めて首里城を見た。「王居はシナ風にして、これを見するに朝鮮王城を縮小せるものごとし」とその印象を述べている。円了と師範学校校長の西村光弥は先年、東京で面識があり、懇切に諸事を斡旋してくれたと述べている。また、教員の松下之基は円了と大学予備門の同窓であり、松下の案内で首里城を通覧したと述べている。さら



に当日には侯爵の尚家を訪れ、また尚家の菩提寺である円覚寺を参拝している。

2月6日(水)雨。円了は午前、首里中学校において中学生および養秀学校生のために講演を行った。首里中学校は現在の沖縄県立首里高等学校の前身である。演題は「世界周遊」である。内容は、まず「東洋の古国は滅亡、又は半独立国となれるに、わが日本帝国のみ真の独立国となれり、されば我国民は我国を愛せざるべからず」と説き、続いて外国の中学生の状況について話をし、さらには各国の気風の違いに論及して、最後には「本県人も海外に出て起業せざるべからず」で結んでいる。

午後、那覇に帰り、真教寺において各宗寺院のために講話を行った。演題は「教育勅語と仏教」である。内容は「教育勅語は忠孝為本にして、仏教は慈悲報恩の教にして、分て父母の恩、国王の恩、衆生（総ての生物）の恩、三宝（仏法僧）の恩の四とす。故に仏教も忠孝為本なるを以て教育勅語と仏教とは相一致せり」というものである。

円了は沖縄の宗教の状況について次のように述べる。「本県は旧来より首里、那覇両区の間には禅宗、真言宗各数カ寺あり、そのほか新開の真宗寺院真教寺あるのみ。しかしてその寺院は一定の檀家信徒あるにあらず。概して琉球には神仏二教ともに皆無なり。その固有の宗教は祭天教または祖先教と名付くべし。天祠の祭りと称するものあり。また「ノロ」と名付くる神官のごときものあり。墳墓にいたりては、その壮麗なること世界第一なり。山根をうがちてこれを築き、すべて石をもって四囲を畳み、その屋根の破風形なるものと、亀形なるものと二種あり。」(8)

2月7日(木)晴。この日から円了は名護に行く。船便である。辰島丸で4時間かけて名護に到着した。現在はバス路線があり、筆者が乗った鈍行のバスでは那覇から名護まで約2時間で行く。名護には、県属の仲本政世、哲学館出身の阿波根、本願寺布教使の中村慶巖、小学校長の一色隆三が同行した。名護に上陸した際には、郡長の喜入休、郡視学の

後藤猪六など数名の歓迎があった。旅館は一心館。

2月8日（金）晴。午前と午後、名護高等小学校（明治15年創立）で講義を行った。郡教育会の主催である。演題は「修身教会の主旨」、「精神修養法」、「迷信談」である。

「修身教会の主旨」では、まず朝鮮、満洲について触れた後、日露戦争勝利の原因に論及し、それは国民の一致のためであり、その一致協力は言語・人情・風俗の一致がもたらしたものであるという。沖縄でそれを進めるためには学校教育と雑婚、宗教による必要があるが、即時の実行は不可能であるから修身教会による教育が必要であると述べる。

「精神修養法」では、哲学堂の四聖に触れた後、精神修養の第一は模範とすべき人物を常に思うことにあると述べる。そのために模範となる人物の伝記を読むべきことを説く。さらに教育家は理想上の人を思うだけでなく、理想上の国家をも常に考えるべきと述べる。

「迷信談」では、西洋では、キリストに関連して金曜日を嫌い、13という数字を忌むことや、日本で説かれる金神は存在しないことを説く。

講演後、円了は沖縄の在来宗教の「ノロ」の社に行く。円了は次のように述べる。「内地の村社に比すべきものなり。神体に当たるべきものに、三個の石あるのみ。社内に珍藏せる古鏡およびマガ玉を拝観す。その社背に旧墳あり。」<sup>(9)</sup>

2月9日（土）晴。農学校で生徒のために講演する。農学校は、国頭郡組合立農学校として1902（明治35）年に創立され、現在は県立北部農林高等学校と称する。この時の演題は「欧米周遊」である。内容は、欧州人と米国人の気質の違いを述べ、我が国人は欧米人の有形の長所を模倣するだけでなく、無形（特性）の長所を必ず模倣しなければならないことを述べる。筆者も農林高等学校に行ってみたが、名護の海に近いとても風光明媚なところであった。なお『沖縄県国頭郡誌』（1919年）には1907（明治40）年の記録として「二月文学博士井上円了来郡、揮毫多

し」(10)との記録がある。以上、名護での巡講であった。

午後3時、円了は、再び那覇に向かう。今度は陸路である。円了はこの時の様子を次のように記す。「終日、名護湾にそいて行く。あるいは砂際をわたり、あるいは巖頭を攀じ、名護を去ること六里、恩納間切に至りて宿す。間切とは村のことなり」(11)。ここで円了は沖縄の様子を次のように観察する。

婦人はみな荷物を頭上にいただく、その歩すること走るがごとし。たまたま豚の児を頭上に乗せて行くを見るは奇観なり。男女おおむねはだしにして、草鞋を用いず。常食は薩摩薯にして、これを唐薯と称す。泡盛焼酎をたしなむ。その多量なるは、一時に五合を傾くという。豆腐を食することまた多し。市中に豆腐屋と線香屋の多きは他県に見ざるところなり。線香は毎戸祖先の霊を祭るに用い、各家必ず霊壇を設けて、累代の位牌を安置し、毎日拝礼をなす。(12)

円了は民家に投宿し、蚊を払いながら泡盛を傾けて疲労を癒した。そしてあらかじめ蚊帳、寝具、食品を携帯するのはシナ、朝鮮の内地旅行と同じであると述べる。

2月10日(日)雨。恩納を出発して五里、読谷山に至り、役場で昼食を食す。昼食後、北谷から腕車(人力車)に乗り、夜七時に那覇に到着する。

2月11日(月)晴。この日は紀元節である。午後、島尻郡糸満村(現在の糸満市)で講演を開く。教育会の主催で、会場は糸満小学校である。糸満小学校は1880(明治13)年に兼城小学校として創立し、3年後の1883(明治16)年に分離独立して糸満尋常小学校となった。現在も存在している。演題は「社会教育」、「実業振興策」である。「社会教育」では「思想を大ならしめ、且世界的ならしむる為、万国地図を室内に掛くべし。南洲翁も或事に感ぜられて万国地図を掛けられたりという」と述べた。「実業振興策」では「実業振興策は、第一忍耐、第二勉強、第三儉約、第

四信用、第五智識にあれば、之等を実行すべし」と説いた。円了は糸満について「県下第一の漁業場」と述べている。

2月12日（火）晴。この日は旧暦の大晦日にあたり、市中雑踏を極めていた。円了は終日旅館で休憩する。円了は琉球の特色として、ハブ、薯、豚、泡盛、ユタ、墓場、赤い瓦の七つであるとして、これを次の三十一文字に綴っている。「ハブと薯、豚と泡盛、ユタ墓場、赤き瓦や七奇なるらん」(13)。続いて琉球の不思議として、梅に実が結ばないこと、鴉が住んでいないこと、梅、桃、桜が一時に開き、葉と花とを同時に見ること、春夏の二つの季節だけがあり秋冬がないことを挙げている。このほか、家屋や風土病について述べている。

2月13日（水）晴。午前、監獄署に行き、囚徒に対して一言を述べ、典獄の三井久陽の案内で獄内を見学した。午後、松山小学校において那覇青年会主催による講演を行う。演題は「西洋道徳と東洋道徳との異同」である。内容は、第一に、西洋では夫婦が道徳の基礎であるのに対して、東洋では父子が道徳の基礎であること。そして日本と中国はともに忠孝為本であるが、日本の場合は絶対的忠である。これが、日本の道徳が中国のそれよりも優れたところであること。第二に、国民の一致共同が必要であることを述べる。主催の中心人物は、沖縄出身の民俗学者、言語学者、沖縄学の父として知られる伊波普猷（1876-1947、当時31歳）であった。その日の夕方、円了は伊波の家で琉球料理の饗応を受ける。円了は伊波について「伊波氏は博言学者にして、かたわら歴史を修め、目下もっぱら琉球史の研究に従事せらる。滞在申しばしば氏と相会し、大いに益するところあり。」(14)と述べている。

2月14日（木）雨。午後、首里に行き、哲学館出身の阿波根、岩原とともに、尚家の廟所および孔子廟を拝観する。円了は彼ら自分の教え子たちのことを「両氏は哲学館出身たるのかどをもって、毎日代わりあって那覇を往復し、奔走周旋の勞をとられたるは、感謝するところなり」

と述べている。そして阿波根の家で休憩した後、女子小学校において、通俗懇談会の依頼に応じて講演を行う。

女子小学校は、首里尋常高等小学校女子部として 1888（明治 21）年に創立された学校で、現在的那覇市立城西小学校である。首里城の近くに位置する。演題は「社会教育及社会道德」である。内容は、アイルランドのベスブルク村の話である。そこには酒屋、盗賊、巡査がなく、平素、各自の職業に勉励し、日曜日には教会に行って説教を聞くという模範的な生活をしていることを述べ、さらに公德の重要性についてイギリスの例を交えて述べる。この日の夕方、奈良原知事をはじめとする県関係者より宴に招待される。円了はそこで披露された琉球踊りについて詳しく記載している。

2 月 15 日（金）晴。京城丸で沖縄を出発。午後 5 時に乗船する。岸本、田原、仲本、そして哲学館出身の阿波根と岩原が船内まで円了を送る。6 時に抜錨する。これで 13 日間にわたる円了の沖縄巡講は終わった。

### 3-3 講演について

ここでは円了の講演を取り上げて、1 主催団体、2 講演内容、3 演題と聴衆との関係、4 揮毫について考えてみたい。まず円了の講演地と演題を整理すると<表 1>のようになる。これは『沖縄教育』18 号に掲載された「報告書」の中の「開場の場処」をもとに、それに演題を加え、講演日の順に配列したものである。

講演は 11 カ所、16 回にわたり行われた。以下、これを 4 つの観点から考察する。

第一に主催団体である。これは三つに分けられる。第一は教育団体および学校である。内容は、教育団体としては沖縄県教育会、国頭名護郡郡教育部会、島尻郡糸満郡教育部会の 3 団体。学校としては師範学校、高等女学校、中学校、養秀学校、農学校の 5 校である。第二は社会団体

＜表 1＞井上円了沖縄講演リスト（地名は当時のまま）

日	地 名	主 催	会 場	(通し番号) 演 題
3 日	那覇区	沖縄県教育会	松山小学校	1 精神修養法 2 心理的妖怪
4 日	同上	愛国婦人会	真教寺	3 迷信と宗教との関係
同	同上	医学会有志	同上	4 心意療法
5 日	首里区	師範学校及 高等女学校	師範学校	5 教育と宗教との関係 6 靈魂不滅談
6 日 午前	同上	中学校 及養秀学校	中学校	7 世界周遊
午後	那覇区	各宗寺院	真教寺	8 教育勅語と仏教
8 日	国頭名護郡	郡教育部会	名護小学校	9 修身教会の主旨 10 精神修養法 11 迷信談
9 日	同上	農学校	農学校	12 欧米周遊
11 日	島尻郡糸満	郡教育部会	糸満小学校	13 社会教育 14 実業振興策
13 日	那覇区	那覇青年会	松山小学校	15 西洋道徳と東洋道徳 との異同
14 日	同上	通俗講談会	首里女子小学校	16 社会教育及社会道徳

で、愛国婦人会、医学会、那覇青年会、通俗講談会の 4 団体である。第三は宗教団体で、各宗寺院である。このように見ると主催団体は教育団体、学校が多いことがわかる。

第二に講演の内容を分類すると次のようになる。便宜的に 7 つの項目を設定し、そこに 16 の講演をおよその内容から分類した。1. 修身教会、勅語関係 (1、5、8、9、10)、2. 妖怪、迷信関係 (2、3、11)、3. 宗教関係 (5、6、8)、4. 教育・道徳関係 (16)、5. 社会、実業関係 (14、15)、6. 世界紀行 (7、12)、7. 医学関係 (4)。ここから見ると、当然ではある

が1. 修身教会、勅語関係が一番多いことがわかる。ちなみに筆者の注意を惹いたのは、前年に実施した朝鮮・満州旅行の内容が反映していることである。9「修身教会の主旨」では、「朝鮮の鉄道の駅名は日本音にて称することとなれり、実に愉快なり」、「満州にては酒醬油など氷結するを以て衡にて売買す」と述べるほか、朝鮮巡講の際に作った「豚小屋中家族坐、土饅頭下祖先休」<sup>(15)</sup>という朝鮮の家屋と墓について詠んだ漢詩を紹介している。

第三に講演の内容と聴衆との関係を考えてみる。講演であれば当然であるが、円了は聴衆に合わせた演題を設定していたようである。例えば、学生を対象とする講演では「世界周遊」、「欧米周遊」、医学会有志では「心意療法」、そして僧侶を対象とする講演では「教育勅語と仏教」などから確認できる。

第四に、講演とともに行った揮毫についてである。「沖縄県紀行」に揮毫に関する記事は出ていない。しかし、これは現地の人にとっては深く印象に残ったようである。円了を案内した仲本政世は『沖縄教育』18号の中で「掛物及額面、数百枚揮毫せられたり」と述べている。滞在13日で数百枚の揮毫であるから相当な数である。前に紹介した『沖縄県国頭郡誌』に円了の記録として「二月文学博士井上円了来郡、揮毫多し」と、揮毫に注意しているのも頷ける。後に見る『琉球新報』は円了を批判する中で「三円五円又は拾円と云ふが如き揮毫の代価附けを県下に配布」し、最終的に「六、七百円」の金額になったと述べている。「六、七百円」が正確な数字かわからないが、一番安い三円で200枚書いても600円になるので、そう外れた数ではなさそうである。

### 3-4 巡講後の報告「御報告」

円了は沖縄巡講終了後の4月、文部大臣に「御報告」という名の報告書を提出する。ここではそれを紹介しながら<sup>(16)</sup>、沖縄巡講の背景、お

よび円了の沖縄観を考察する。報告書の題目は「御報告」、日付は「明治四拾年四月 日」、相手先の名前は「文部大臣牧野伸顯殿 秘書御中」とある。以下、全体を三段に分け内容を見ていく。

まずは冒頭の部分である。原文を掲げる。

御報告 第三回

沖縄県

先般大臣閣下の御添書を拝領して一月廿七日東京を発し、二月二日沖縄県に着し、二区二郡を巡回し、学校教育と同時に家庭教育、社会教育の必要なる所以を説き、戦後の経営は公德養成より始めざるべからざる所以を述べ候處、各處共に大に其旨趣に賛同し、既に実行の方法を義定せらるゝまでに運び申候、其際、男爵奈良原知事より分外の御厚遇を受け、格別の御助成を蒙り、諸事に付、多大の便宜を得、又公爵尚家よりも過分の歓待を辱うしたるは共に大に謝する所に御座候、(17)

まず冒頭の「御報告 第三回」が注目される。第三回ということは、それ以前にも文部大臣に対して巡講の報告を行っていたことを窺わせる。続いて書き出しの「先般大臣閣下の御添書を拝領して」という表現が注目される。すなわち円了は、文部大臣が巡航先の自治体や教育機関に対して円了に対して便宜を図るようなことが書かれた文書を得ていたものと思われる。そしてそれは同時に、現地に通達のような形で出されたのかもしれない。おそらくこれがあったからこそ、県知事をはじめ、有力者が円了を出迎えたと考えられる。

続いて、講演の目的は「学校教育と同時に家庭教育、社会教育の必要なる所以を説き、戦後の経営は公德養成より始めざるべからざる所以」と述べている。これは演題の「精神修養法」、「社会教育」、「実業振興策」などが該当するであろう。そしてそれらについて賛同を得たことを述べ



ている。

さらに、奈良原知事および公爵尚家の支援を受けたことに対する感謝が説かれる。

「御報告」は第二に、「開会の場処」として地名、主催、会場の一覧表を掲げるが、これは省略する。

「御報告」は第三に、沖縄に関する現状の報告と問題点、それを解決するために円了が主唱する修身教会が必要であることを述べる。内容をまとめると次のようになる。

沖縄に関する全体的な印象として、言語・風俗・人情が他府県とは大いに異なり、あたかも朝鮮満洲を旅行するような感じがある。しかし教育については自分の予想よりも進んでいた。ただ宗教は本土とは異なっている。沖縄には神仏二教を信じる者は少ない。その代りに固有の信仰が盛んである。そして婦女子は迷信に捕らわれている。

こうした中、「国民の統一」上、必要な「言語・風俗・人情」を本土と同じにするためにはどうすべきか。学校教育では不足である。考えられる方法としては、1. 他府県人と雑居雑婚させる、2. 神仏二教を広める、の二つが挙げられる。しかし、これらは即時に実行することは難しい。そこで円了が提唱する修身教会を設け、毎月一、二回小学卒業以上のものを集めて訓誡する道を取るのが最も適当である。これにより小学校で学んだことを復習し、迷信を戒め公德を勧め、家庭教育、社会教育の改善を促がし、教育勅語の中の忠孝為本の道徳を開説すれば、言語風俗人情の統一はその効果を上げることができるであろう。現状を見るとせっかく学校で教えた言語や訓戒も家に帰ると消失してしまう。そこで修身教会をつくれば、これらの問題が解決すると考えられる。このことは「皆々同感を起し」たと述べる。

このように円了は国民の統一＝言語・風俗・人情の一致のために修身教会の設立を訴えたのである。今見たように円了は聴衆が修身教会につ

いて「同感を起こし」た、と述べているが、その後、沖縄に修身教会ができたという話は聞かない。

### 3-5 沖縄県紀行

続いて円了は修身教会の雑誌『修身』（第4巻5号）に「沖縄県紀行」を掲載する。そしてそれが後に『沖縄教育』19号に転載された。前述したように、これは『南船北馬集』「沖縄県紀行」と同じ文である。この内容が沖縄県人を怒らせるのである。問題となったのは「沖縄県紀行」の結論の部分である。そこで円了は三つのことを述べる。第一には、「沖縄県人の県民性の問題とその改善方法」、第二には、「沖縄県人は忠君愛国の精神に欠けること」、第三には、「「本邦人」が琉球を度外視していることは問題である」ということである。以下、見て行く。

#### （1）沖縄県人の県民性の問題とその改善方法

沖縄県は地味といい気候といい、誠に申し分なき天幸を得たる地というべし。しかして人民の生活程度を見るに、那覇、首里を除くの外は、すこぶる劣等に位せるものごとし。その原因種々あるべきも、天幸に安んじて奮発心を欠けるは、その主因なるべし。また、気候の影響が人をして懦弱ならしむるも一原因なるべし。他地方と交通の不便なるより、なにごとにも刺激なく競争なきも一原因なるべし。井蛙の見を有し、他府県の実況を目撃したることなきも一原因なるべし。よってその気質を改変するには、学校教育はもちろん、学校卒業後にもときどき訓誡を与え、忍耐、奮励、勤儉、貯蓄の気風を起こさしめざるべからず。

#### （2）沖縄県人は忠君愛国の精神に欠けること。下線部が後に問題となるところである。

沖縄は従来その国固有の歴史を有したるをもって、忠君愛国の精神  
において大いに欠くところあるがごとく感ぜり。儒教の感化によ  
りて、孝道を重んじ、祖先を敬することを知るも、国家の觀念に至  
りてははなはだ乏しきを覚ゆ。故にこの点は同県の教育の任にな  
うものの、大いに注意して訓誡せざるをえざるところなり。また、  
学校卒業後といえども、ときどき勅語の聖旨を敷衍して訓示するを  
要するなり。これ、余が修身教会の設立は沖縄県において殊更にそ  
の急要を感じたるゆえなり。

(3)「本邦人」は琉球を度外視せず注目すべきであること。下線部が  
問題となる部分である。

本邦人、ややもすれば琉球を度外視し、各方面の研究において、こ  
れを念頭に置かざる風あるは、余の大いに怪しむところなり。歴史、  
言語、風俗、宗教上の研究においては、その関係の多大なるは、北  
海道、台湾の比にあらざるべし。動物、植物の研究のごときも、そ  
の道に資するところ多しという。故に講学の士は、第一に沖縄県を  
観察せざるべからず。実業家もまた、その地味、地形、物産を調査  
する必要ありと信ず。他日もし、足を台湾に進めんとするものあら  
ば、必ず腰を琉球に憩うべしとは、余が内地人に忠告するところな  
り。

この中、(1) 沖縄県人の県民性の問題、(2) 沖縄県人は忠君愛国の  
精神に欠ける問題の二つについて考えてみると、筆者は、これがすべて  
円了の実見に基づくものではないと考える。実はこれらは、以前から沖  
縄で問題となっていたことだったのである。

1896(明治29)年、明治後期の沖縄の教育界、政治界の重鎮であった  
高良隣徳は「琉球に於ける教育上の二大関点」という論文の中で、沖縄

県人の問題を二つあげる。第一は「沖縄県に於ては人民一般に日本帝国臣民たるの思想に乏しく、従って忠君愛国の精神に關くる所あり」、第二は「琉球教育に於いて、特に注意すべき他の關点は人民一般に氣力に乏しきの感あることなり」である。これは、順序は前後するが円了の指摘と同じ内容である。川上豊蔵も論文「本県兒童に日本國民たるの精神を發揮せしむべし」（1896 年）として、忠君愛国教育の必要を説いている（18）。

これは推測であるが、円了は巡講をしながら、教育関係者からこうした沖縄の教育上の問題点をしばしば耳にしたのではないか。そして、それがこの報告に反映されたのではないだろうかと考える。もしこれが正しいとするならば、沖縄県の教育関係者の立場からすれば、円了は自分たちが苦悩している沖縄教育の問題点を代弁してくれたことになるであろう。

いずれにせよ、これらの指摘は国民の一致すなわち言語・風俗・人情の一致を求める円了からすると当然であったと思われる。しかし、これは沖縄県人の心情からすると容認できないものであった。また、(3)「本邦人」は琉球を度外視せず、もっと注目すべきは、円了なりの沖縄に対する「配慮」であろうが、これもまた沖縄県人の反感を招く一因となる。

#### 4. 筆禍事件—円了の「沖縄紀行」に対する沖縄人の怒り

前章で見た「沖縄県紀行」に対して沖縄の新聞『琉球新報』は、円了を批判する記事を掲載する。それは明治になって日本に併合された沖縄県人の複雑な心理構造が背景にある。この事件は、沖縄の民衆史研究においては既に取り上げられてきた（19）。ここではそれらを参考にしながら考えていきたい。

#### 4-1 『琉球新報』の円了批判

『沖縄教育』19号が発行された3日後の9月18日、『琉球新報』(20)は「無礼なる井上博士」と題し、円了を批判する文を掲載する。ここでは全文を区切りながら見て行くことにする。(以下、原文は読みやすさを考慮し、読点を付し、適宜改行した)

第一に、まず円了に対する懐疑心を次のように述べる。

幽霊博士井上円了氏が嚮きに本県に渡来した時、専ら修身教会遊説の爲めである云々との触れ込みであったが、其の実は余りに感心の出来ない書を書いて、之を三円五円又は拾円と云ふが如き揮毫の代価付けを県下に配布しておいて、所々方々駆けヅリ巡ったのであるから、吾人は最初より同氏の腹の中を見透かしておった、夫れ故に正直余りに歓迎すると云う気心もなく、実は少々御迷惑千万に想ふておった、

円了渡来の目的が、修身教会のためであると言っていたが、実際には揮毫によるお金集めが目についたということである。続いてこうした円了を冷めた目で見ていた様子が説かれる。

其の滞県中、円了氏に対する待遇上に就き、社中で評議のあった時、ドウモ斯う云ふ坊さんが度々やって来られては県下の爲めに碌なことはない、貧乏なる県民の財囊は其の蚯蚓の様な書体で以て一銭でも多く取り去らるゝのが不為であるから、宜く之れは歓迎せないのがよろしい、円了坊さんが書で成功したと云ふことを聞いたなら、朝鮮人の亡命客(其の時までは日韓の関係が今日の様でなかった)もドシドシやって来る、客人優待は謙敬なる県民の已むを得ない情誼ともあるから、猫も杓子も心力のあらん限りを尽すのである、亡

命人の書きもので又々財布を絞らるゝ様のことゝもなるであらふ、斯の様な金取り商売は一日も早やく県地を去って貰った方が寧ろ幸福であると云ふことに一決した、

夫れからと云ふものは多少御世辞丈けのことは博士と云ふ看板に免して行つてはおいたかなれども、流石書道で人の金銭を絞取りらふと云ふ位のさばけた人間が大枚六七百円もさらつて行つたことだから、此の恩義を想ふても県下の不名誉なことは為はすまいと考へておつたら、果して野狐禪は何処までも野狐禪である、帰京後は随分な口上を云ひ触れて居ると云ふことだ、

続いて『沖縄教育』19号の記事を引用しながら、帰京後の円了が沖縄県人について「忠君愛国の精神に欠ける」と述べたことを批判する。

オマケに其の機関雑誌「修身」雑誌上には此の旅行を書いて、何だか気持悪い誤謬を述べておるが、其の結末に至つて斯ういふことを書いて天下に吹聴しておると云ふことが沖縄教育第十九号に転載されて居る、

沖縄県は従来其の固有の歴史を有しおるを以て忠君愛国の精神に於て大に欠くる処あるが如く感ぜり儒教の感化によりて孝道を重んじ祖先を敬することを知るも国家の觀念に至りては甚だ乏しきを覚ゆ云々

此の坊さん、県民の懐から六七百円の大枚をさらつて行つて、県民の全部を精神的に殺して居る、彼れは県民に対して甚だしき無礼を働いて憚らず、之を文筆に載せて県民を譏誣して居る、円了坊さんの心理的研究が人心の奇幻をのみ研究して、正直な人心の理を研

究して居ないと云ふことは幽霊研究と云ふので分って居るかなれども、斯様に生々活潑なる人民を捉まへて愛国心が乏しいだの、忠君の念がないのとは何処をドウ見て、どんな口で云はれたものであるふか、

続いて同じく『沖縄教育』19号の記事を引用しながら、円了が沖縄県人について「本邦人動もすれば琉球を度外視して居る」のくだりを引用しながら批判を続ける。

夫れから此の坊さんは、

本邦人動もすれば琉球を度外視して居るかなれとも各方面の研究に於ては其関係の多大なるは北海道台湾の比にあらざるべし・・・故に講学の士は第一に沖縄県を觀察せざるべからず云々吾人は斯様な野狐禅の勧誘に乗って来県する人物は到底、碌なものではないと思ふから、爾來此の種の来県は真平御免を願いたい、幽霊の研究ならば東京では青山墓地もあれば小塚原と云ふ気味の悪い所もある、新たらしき墓所も怨みの深い墓場も円了坊さん御撰択は勝手であるから、今後は県下の方を向ひて唾吐くことも御免願いたい、県下に幽霊は居りませぬ、真正正銘な人民で、然かも忠君愛国など云ふことは此の世に於ける県民の一大道徳の精髓となつて居る、幽霊のことは幽霊の処に行つて御研究なさつて下さる様に・・・此の他にも云ふべきことは多けれども人間の言葉は到底御分りがないであらふ、マア之れ位で止めておきます・・・・・・・・

ここで自分たちは、忠君愛国が「県民の一大道徳の精髓」となつてゐることを述べ、円了を批判する。さらに円了が「本邦人」と述べたくだりを批判する。

県民に無礼を加はへるものに県民は礼を以て待遇出来ませぬ、野狐禪と云ひ、坊さんと云ふこと御気に障へたら、今後は少々御口を御慎しみなさいませ、幽霊見る眼で県下を見ても到底正皓は得ないでしよふ・・・生まれ変って御出なさい・・・円了坊は何処の御国の人であろか、本邦人云々だなんて、自分一人か日本人見た様なことを云ふで居ら、琉球は何処の国であろふ、真逆幽霊の国と間違へは困まるから、右迄一寸御注意に及ぶ、

以上である。ここでのポイントは二つある。第一は、沖縄人が忠君愛国の精神に欠けると述べたことに対して『琉球新報』記者は忠君愛国が「此の世に於ける県民の一大道徳の精髓」と反論していることである。これは『琉球新報』記者の立場からすると日本への同化を自負していたのにもかかわらずそれを否定されたことへの怒りである。第二は、円了が「本邦人」が沖縄を無視するなということであるが、沖縄人からすると「本邦」の中に沖縄は含まれないのかという怒りである。

そもそも沖縄は江戸時代には薩摩藩の間接支配を受けたが、独立した国であった。それが明治12年に琉球処分により日本に編入された。その後の沖縄人の意識としては、日本と同化するという方向をめざす者が多かったであろう。『琉球新報』記者が批判したのは、日本と一緒にしろという沖縄県人の努力を、日本人（円了）がよく見ていないことにある。これを一般化していえば、政治的弱者が政治的強者と合併し、弱者の側が強者の側への一体化を目指し努力するが、強者の側からその認定を受けないことへの不満である。続く「本邦人」の問題も、自分たちは一体化を目指しているが、それを否定されただけでなく、「本邦人」という集合の中から沖縄が排除されたことに対する怒りである。



## 4-2 河上肇の舌禍事件と円了の筆禍事件

円了の筆禍事件は、それ以上続くことはなかったが、4年後に、あることをきっかけとして再び言及される。それは1911（明治44）年4月、当時、京都大学経済学部助教授であった河上肇（1879-1946）が沖縄を訪問し、「新時代来る」という演題で行った講演に関する舌禍事件である。

河上は講演の冒頭で「沖縄は言語、風俗、習慣、信仰、思想その他、あらゆる点において内地とその歴史を異にするがごとし」ということを前提として、ひとあるいは「本県人をもって忠君愛国の思想に乏しいという」が、自分は今日の世界において、むしろこの存在を高く評価するものであると述べる。

これは円了の評価とは正反対であることがわかる。円了は忠君愛国の思想に乏しいことを問題としその改善を求めていたが、河上の場合はその点が評価されると説くのである。その理由を河上は次のように述べる。

過去の歴史について見るに、時代を支配する偉人は多く国家的結合の薄弱なところより生ずとの例にて、キリストのユダヤに於ける、釈迦の印度に於ける、いずれも亡国が生み出したる千古の偉人にあらずや。若しユダヤ、インドにして亡国にあらずんば、彼の者はついに生れざるゆえに、たとい本県に忠君愛国の思想は薄弱なりとするも、現に新人物を要する新時代に於いて、余は本県人士中より他日、新時代を支配する偉大な豪傑が現われんことを深く期待するものである。

これは沖縄の実情、すなわち琉球国が日本に滅ぼされたことを念頭に置き、このような国だからこそ新時代を開く人物が出ることを期待するという内容である。繰り返すが、円了とは正反対である。しかし、これ

に対して沖縄の言論は激怒する。

『琉球新報』は次のように批判する。

河上助教授が本県民を指して忠君愛国の誠に欠けたると言い、さらにユダヤ、インドの亡国民の如く評下したるは本県民の面上に三斗の啖を吐いたのも同然、聞き捨てならん。

この怒りの背後にも円了の時と同じ心情があるであろう。すなわち自分たちは日本と同様に忠君愛国の精神をもっているという自負心を認めないことと、さらに自分たちの歴史を卑下したことに對する怒りである。『琉球新報』以外の新聞も異口同音に河上を批判した。しかし『沖縄毎日新聞』(21)は、後に論調を変え、この河上の指摘を尊重すべきであると、4月9日付の記事(摩天樗「沖縄青年同志俱樂部を設立しては如何」)において次のように述べる。ここに4年前の円了の筆禍事件が再登場する。まず次のように述べる。

琉球新報記者は河上法学士の演説を攻撃して遠来の客に甚しき無礼を加えた。若しそれ琉球新報記者の議論にして内容あり重みあり而して河上法学士の意見を云為するだけの価値あるものならば吾等強いて其輕率を咎めようとはしない。而し尤もらしい屁理屈ばかりならべて徒に悲憤慷慨し如何にも大学の先生を槍玉にでもあげたやうな顔をして居るのを見ては噴飯せずにはゐられぬ。

そして円了の時の騒動に触れ、琉球新報の記者の姿勢を批判する。

五六年も前のことと記憶するが、博士井上円了が沖縄人の忠君愛国の思想に乏しいと言ったとき琉球新報は今度と同じ様な調子で御氣

の毒に思ふ程独りで憤慨して博士の私行上の悪口に迄言及したことがある。琉球新報はこんなことは余程熱心と見えるが一体記者は一般琉球人のご機嫌を執るためにこんなことをいふのか。或は真に琉球人のために是れ言はざるべからずという必要に迫られて言ふのか。

円了の「私行上の悪口」とは揮毫の問題であろうか。続いて自分たちは河上の見解を尊重することを述べる。

私は琉球記者の頭の中にある忠君愛国家たらんよりも国家思想に乏しいといはれるのを喜ぶのである。琉球記者一流の人に忠良なる日本人と呼ばれんより亡国の民といはれるのを希ふのである。理由は預かって置く。

さて、この事件について、1990年代に沖縄県知事を務めた大田昌秀は、1967年に刊行した『沖縄の民衆思想』の中で次のように述べる。

河上肇博士の舌禍事件は、たんに一回きりの偶発的な事件ではなかった。明治・大正・昭和、戦後と時代をたどってみると、これに類似の事件がくりかえし起こっている事実にわれわれはいやでも直面しなければならない。そこに筆者は、看過できない沖縄人の心理、もしくは意識とでもいうべきものの存在、つまり特性みたようなものを、見る思いがするのである。(22)

この「類似の事件」の中には当然、円了の事件も入っているであろう。大田が述べる「沖縄人の心理」について、大田は同書の他の箇所でも沖縄人の「他からの評価に対する特徴」がはっきりと反発と悲観の二方向

へ分れるとして、次のように述べている。

他からの評言にたいしてはその当否を問わず極端なまで反発する人々がいるし、他方、自らの歴史をのろい、孤立した環境に絶望する人たちも出てくる。差別意識に捉われ評言に腹を立てる人びとは、反面、しばしば事大主義のとりこになりがちである。(23)

この中、「他からの評言にたいしてはその当否を問わず極端なまで反発する人々」とは、円了、河上肇に対する『琉球新報』の反応があてはまるであろう。前述したように、日本との同一化を志す中でそれを否定された時の不満が怒りとして現れると同時に、それが追い付かないものであることを認識する時に、「自らの歴史をのろい、孤立した環境に絶望する人たち」が出てくるということであろう。近代沖縄が抱える精神的な問題がここにある。

## 5. 結語

以上、円了の沖縄巡講について、円了自身の記録『南船北馬集』『沖縄県紀行』に新資料を加え、巡講の内容を再現し、さらに円了の報告「沖縄県紀行」が引き起こした筆禍事件について見てきた。まず内容を整理する。

第一に、巡講の内容では、(2) 沖縄巡講以前の修身教会活動を整理したのち、(3-1) 沖縄巡講の資料について述べ、(3-2) 円了の沖縄巡講 13 日間の足取りを示した。続いて(3-3)講演内容を分析した。そして(3-4) 円了が文部大臣に提出した報告書からは、円了が巡講する際に文部省の通達があったのではないかと推測した。さらに (3-5) 円了は「沖縄県紀行」の中で、沖縄県人が「忠君愛国の精神に乏しい」と述べ、さらに「本邦人」に対して沖縄にもっと注目すべきことなどを説いていたことを見

た。

第二に、筆禍事件は、円了が「沖縄県紀行」で述べたことがらを沖縄の新聞社が批判したものである。(4-1)『琉球新報』は、忠君愛国は「県民の一大道徳の源泉」であり、また「本邦人」に対して沖縄に注目せよとは、沖縄は本邦ではないのか、と怒りを表出する。(4-2) 河上肇の舌禍事件に際しても円了のことが言及されていた。

これは政治的強者が弱者を吸収した際、弱者の側に起こる心理の反映である。同化を志向する者が、同化を認められない時に起こる怒りである。これは近代の沖縄の置かれた状況と、それが沖縄の人々にもたらした複雑な心情に関連する問題であった。

最後に円了の沖縄巡講の意味を考えてみる。円了は日本人の道徳の向上のために修身教会の設立を説き、日本の言語、風俗、人情の同一を説き、日本の国力の向上を目指した。その中で沖縄の問題点を指摘した。これは円了の立場からすれば当然のことであっただろう。その一方で、沖縄の立場からすれば、同化させられた日本に、自ら同化しようとしても認めてもらえない不満があった。これは円了の全国巡講が持つ多様な側面である。今後もこうした調査を続けて行きたい。

## <参考文献>

### 1. 一次文献

井上円了「沖縄県紀行」『南船北馬集』第1編(『井上円了選集』12巻、東洋大学創立100周年記念論文集編纂委員会、1997年、原著は1908年)

沖縄教育会『沖縄教育』復刻版(不二出版、2009年から15年)

沖縄県教育委員会編『沖縄県史』第5巻(国書刊行会、1975年復刻、原本は1969年)

沖縄県教育委員会編『沖縄県史』第19巻(国書刊行会、1989年復刻、原本は1969年)

沖縄文学全集編集委員会編『沖縄文学全集』第14巻 証言・記録1(国書刊行会、2010年)

『琉球新報』DVD 版/ [『近代沖縄新聞集成 DVD 版』刊行委員会編] (不二出版、2010 年)

## 2. 二次文献

### 2-1 著作

大田昌秀『沖縄の民衆意識』(1967 年、弘文堂新社)

小股憲明『明治期における不敬事件の研究』(2010 年、思文閣出版)

我部政男、宮城保編『明治・大正・昭和沖縄県学校写真帖』(1987 年、那覇出版社)

新川明『異族と天皇の国家：沖縄民衆史への試み』(1973 年、二月社)

### 2-2 論文

朝倉輝一「井上円了の修身教会活動」(『東洋法学』57 (3) 47-66 2014 年)

朝倉輝一「哲学館事件後の教育方針と修身教会活動」(『東洋通信 2014 特別号 通信教育部設置 50 周年記念号』53-60 2014 年)

朝倉輝一「井上円了の後期の思想について—修身教会活動との関係から」(『国際井上円了学会』(3) 2015 年)

仲地哲夫「沖縄における天皇制イデオロギーの形成」(菅孝行『天皇制の理論と歴史』、1987 年、柘植書房)

三浦節夫「井上円了の全国巡講」(『井上円了選集』15 巻、1998 年)

## 【註】

- (1) 三浦節夫「井上円了の全国巡講」(『井上円了選集』15 巻、1998 年)
- (2) 朝倉輝一「井上円了の修身教会活動」(『東洋法学』57 (3) 47-66 2014 年)、朝倉輝一「哲学館事件後の教育方針と修身教会活動」(『東洋通信 2014 特別号 通信教育部設置 50 周年記念号』53-60 2014 年)、朝倉輝一「井上円了の後期の思想について—修身教会活動との関係から」(『国際井上円了学会』(3) 2015 年)
- (3) 円了は 1907 (明治 39) 年に朝鮮、満州を、1918 (大正 7) 年には朝鮮を巡講している。拙稿「井上円了の朝鮮巡講に関する資料—植民地朝鮮発行の記事を中心に」(東洋大学井上円了研究センター『井上円了センター年報』23、2014 年)
- (4) 井上円了『宗教改革案』(1902 年、哲学書院) p. 35
- (5) 『東洋大学一覽』(東洋大学同窓会、1918 年) p. 109
- (6) 奈良原繁は鹿児島出身。明治 11 年に内務省御用掛となり、その後、

内務権大書記官、農商務大書記官、静岡県令を経て、日本鉄道会社の社長に就任する。明治 21 年に社長を辞して元老院議員に就任したが即日非職となって鉄道視察のための外遊に出た。(湯本豪一編『図説 明治人物事典：政治家・軍人・言論人』日外アソシエーツ株式会社、2000 年、p. 442) 欧州で円了と出会ったのはこの時であろう。

- (7) 真教寺は西にある寺院。宗派は真宗大谷派で、山号は球陽山。本尊は阿弥陀如来。王国時代、薩摩藩は真宗（一向宗）を禁じ、琉球も同様に禁じていた。1876（明治 9）年薩摩では真宗が解禁されたが、琉球ではまだ禁止されていた。同年、真宗の僧である田原法水は身分を隠し琉球に入り布教を始めたが、信者が王府に逮捕された。しかし、田原の働きにより信者は解放され、1879（明治 12）年には真宗が解禁された。その後、田原は 1882（明治 15）年に西村の海岸を埋め立てて布教所を建設（84 年落慶）、東本願寺講義所とした。1892（明治 25）年には真教寺と号した。真教幼稚園を開設するなど積極的な活動を行っていた。戦災で焼失したが、1972（昭和 47）年に再建された。『那覇の神社・寺院』（那覇市歴史博物館、2014 年）p. 16
- (8) 井上円了「沖縄県紀行」p. 277
- (9) 井上円了「沖縄県紀行」p. 279
- (10) 『沖縄県国頭郡誌』（沖縄県国頭郡教育部会、1919 年）p. 148
- (11) 井上円了「沖縄県紀行」p. 279
- (12) 井上円了「沖縄県紀行」p. 280
- (13) 井上円了「沖縄県紀行」p. 281
- (14) 井上円了「沖縄県紀行」p. 282
- (15) 拙稿「井上円了の朝鮮巡講に関する資料—植民地朝鮮発行の記事を中心に」（東洋大学井上円了研究センター『井上円了センター年報』23、2014 年）所収、明治 40 年 1 月 1 日「満韓旅行談」p. 141、同年 5 月 10 日「朝鮮旅行談」p. 148
- (16) 紙数の関係で全文は省略する。全文は他の沖縄巡講資料とともに別に発表する予定である。
- (17) 「井上（円了）文学博士の報告」『沖縄教育』18 号（明治 40 年 8 月 15 日発行）
- (18) 以上の例は、宜野座嗣剛『沖縄近代教育史—栄光と悲劇への道』（沖縄時事出版、1983 年）pp. 222-232
- (19) 大田昌秀『沖縄の民衆意識』（1967 年、弘文堂新社）「第 6 章 差別意識の形成」「河上肇の舌禍事件」、新川明『異族と天皇の国家：沖縄民衆史

への試み』(1973年、二月社)「5 皇民化への屈折」「河上肇の「舌禍」事件」、仲地哲夫「沖縄における天皇制イデオロギーの形成」(菅孝行『天皇制の理論と歴史』、1987年、柘植書房)、小股憲明『明治期における不敬事件の研究』(2010年、思文閣出版)

- (20) 『琉球新報』は1893(明治26)年に創刊された沖縄最初の新聞。創刊の目的は、1世界の大勢に着眼して其趣く所を察し世界文明の歴史的潮流に伴いこの軌道に拠て以て我沖縄の進歩発展を促がさんとするものなり。2偏狭の陋習を打破して国民的特質を発揮し地方的島国根性を去りて国民的同化を計るものなり、であったという。『沖縄県史』別巻「沖縄近代史辞典」(沖縄県、1977年) p. 574
- (21) 沖縄毎日新聞は、1908(明治41)年12月に創刊された。『琉球新報』、『沖縄新聞』につぐ沖縄で三番目の新聞であった。『沖縄県史』別巻「沖縄近代史辞典」(沖縄県、1977年) p. 146
- (22) 大田昌秀『沖縄の民衆意識』(1967年、弘文堂新社) p. 318
- (23) 大田昌秀、前掲書 p. 331



＜資料 1＞井上円了の沖縄巡講 参考年表

1902（明治 35）円了 44 歳

6 月 『宗教改革案』刊行

11 月 第 2 回世界旅行に出発

12 月 哲学館事件起きる

1903（明治 36）円了 45 歳

7 月 世界旅行より帰国

9 月 『修身教会設立旨趣』刊行

10 月 内務大臣及び文部大臣に『修身教会設立旨趣』を送付  
各府県知事に『修身教会設立旨趣』を送付

1904（明治 37）円了 46 歳

1 月 各府県町村長・小学校長に『修身教会設立旨趣』を送付

2 月 『修身教会雑誌』刊行開始（第 1 号）＊日露戦争開戦

4 月 哲学堂落成式

1905（明治 38）円了 47 歳

9 月 ＊日露戦争終結

1906（明治 39）円了 48 歳

1 月 円了、哲学館大学学長、京北中学校長を辞職。

4 月 奈良、京都、大阪巡講

6 月 足尾・長岡巡講

7 月 私立哲学館大学、東洋大学と改称。香川巡講

8 月から 10 月 長崎巡講

11 月 満鮮巡講

12 月 『修身教会要旨』刊行（退任の辞を付す）

『修身教会雑誌』終了＜以後『修身』＞（第 36 号）

1907（明治 40）円了 49 歳

1 月 『修身』（4 巻 1 号）刊行開始

**2月 沖縄巡講（2日から15日）**

2月、3月 鹿児島巡講

4月 文部大臣に沖縄巡講の報告書を提出。宮崎巡講。

5月 『修身』誌に「沖縄県紀行」掲載

6月 大分巡講

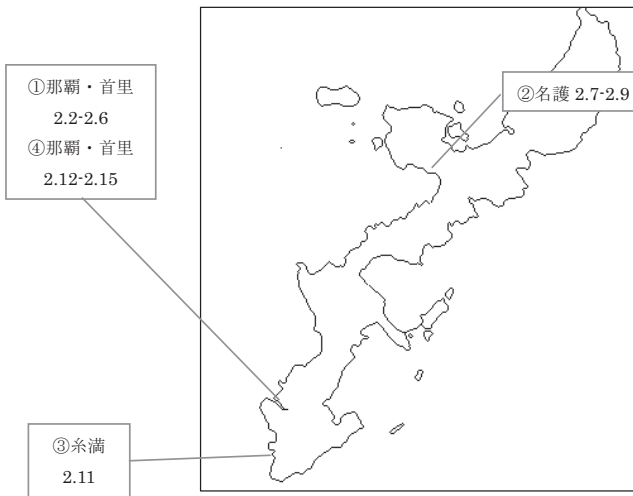
7月から11月 北海道巡講

8月15日『沖縄教育』18号発行：文部大臣への報告書が掲載される。

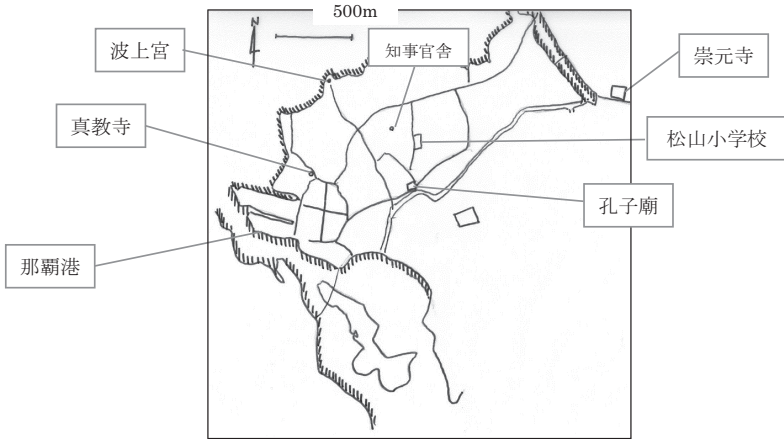
9月15日『沖縄教育』19号発行：「沖縄県紀行」が転載される。

18日『琉球新報』「無礼なる井上博士」掲載

<地図1・沖縄本島>

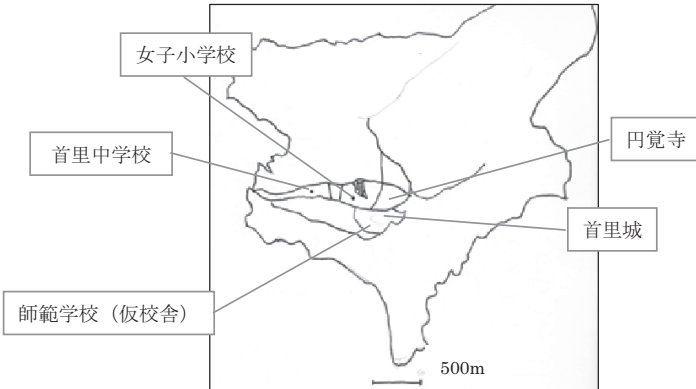


<地図2・那覇>



\* 円了が訪問したところの中、場所が判明したもののみを記した。又吉真三『琉球歴史総合年表』（那覇出版社、1988年）所収「那覇市全図（大正14）」をもとに作図。

<地図3・首里>



\* 『旧首里の歴史・民俗地図』（那覇市史編集室、1978年）をもとに作図。